様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ９ 月　 ６ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｈ０３１５７

研究課題名（和文）年号勘文資料の研究基盤の構築

研究課題名（英文）Construction of research base for Japanese era names

研究代表者
水上　雅晴（MIZUKAMI, MASAHARU）

中央大学・文学部・教授

研究者番号：６０２６１２６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,500,000円

研究成果の概要（和文）：日本の大半の年号が漢籍の出典を持つことはよく知られているが、典拠として使われた漢籍については、学術的な調査・考察の対象となったことがほとんどない。本研究は、新元号を決める会議に提出される「年号勘文」と呼ばれる文書や「難陳」と呼ばれる討議に着目し、これらの中で引かれる漢籍と引用文の調査と分析を中心に研究を進め、国内における漢籍の伝来・受容に関して新たな資料群を見出した。「年号勘文資料」と名づけられるこれらの資料群を対象として進めた研究は、『日本漢籍珍稀資料（年号之部）』全５冊（上海社会科学院出版社、2018年）と『年号と東アジア』（八木書店、2019年）の２点に結実した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本には漢籍の古刊本や古写本が多く残っており、これらに対する研究は、「域外漢籍」、すなわち中国から見て国外に存する漢籍類に対する研究の主要部分を占める。「域外漢籍」は、中国学の中でも国際的に注目されている領域であり、新たな研究資料の開拓が求められている。本研究を通して、国内の年号関係資料には、漢籍の古いテキストはもとより、中国で失われた漢籍の文章、さらには現存の諸文献には全く見えない文章まで含まれていて、「域外漢籍」研究の発展に貢献できる資料群であることが明らかとなった。研究活動を通して得られた知見をもとに編集・刊行した書物２種は、今後の年号研究の基本文献とない得るものである。

研究成果の概要（英文）：Gengo, or Japanese era names had been derived from the phrases of Chinese classics. Few scholars have paid attention to these quoted Chinese books and the academic value of the process of deciding the new Gengos. This project deal with the documents presented by scholars before the conference to decide the new Gengo and the debates by high officials on the proposed Gengos. On the former written the phrases derived from Chinese classics, which often reflected the text of old manuscripts, in the latter can be observed the words related to Chinese classics. Many of these cannot be seen in the other type of academic writings or documents. Two books are the fruits of our research project, which are "Rare Chinese Classical Study Materials Preserved in Japan, the Part of Japanese Era" and "Era Names and East Asia : Thought and Culture Establishing New Era Names".

研究分野：中国哲学

キーワード：年号　漢学　漢籍　東アジア　博士家　王権　術数　難陳

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

申請者は、基盤研究（Ｂ）「日本中世期の経書学に関する基礎的研究」（2007-2009 年度）と基盤研究（Ｂ）「日中校勘学の発展と相関をめぐる複合的研究」（2011-2014 年度）において、日本に伝わる経書古鈔本類に焦点を当てて、漢籍テキストの伝承と解釈の状況に対する考察を積み重ねてきた。その間、研究分担者から、日本で改元手続きを進める際に提出される年号勘文に漢籍が引用されていることに注意を促され、平行して同資料の調査・収集にも取り組んでいた。

新年号を決める諮問会議「改元定」は「朝廷の重事」（『古事類苑』歳時部三・年号上）と称される重要な政治イベントであった。この朝議に提出される年号勘文には、年号案とその典拠である漢籍の原文が記されており、年号勘文を収録する史料や文献には、難陳、すなわち審議の場における討論、改元定の式次第、制定前後の状況を示す日記の記載、関連する故実や記録なども掲載されている。本研究計画では、これらの資料を年号勘文資料と総称する。

調査・考察を進める中で、年号勘文資料において引用・言及される漢籍と解釈が持つ学術的価値が次第に明らかになってきたので、本格的な調査と考察を進める必要性を痛感するに至った。しかし年号勘文資料を利用して研究を進めようとしても、公刊されているのは、『続群書類従』第 11 輯上「公事部」所収の文献にとどまり、研究者にとって利用可能な資料が極めて少ない、という現状も明らかとなった。

２．研究の目的

本研究計画は、上述の事前の準備期間において積み重ねられた知見、問題意識、そしてデータをもとに、以下の 3 点に関する調査、考察、研究事業を進めることを目的とする。

（１）年号勘文所引漢籍テキストの特徴と価値

（２）年号選定過程に関わる学術・思想的要素

（３）年号勘文資料集の作成と公刊

これら３項目の具体的な内容については、次の「研究の方法」において併せて説明する。

３．研究の方法

本研究計画は、適切な規模の研究組織を編成した上で、上記の３項目に対応する研究を進めてく。具体的な方法については、各項目の下において解説する。

（１）年号勘文所引漢籍テキストの特徴と価値

鎌倉時代前期より前に提出された年号勘文に引かれている漢籍の文章は、宋刊本が中国から入ってくる前の古鈔本のテキストが反映されていると推測される。年号勘文を提出する年号勘者は、紀伝道に属する家から選ばれ、提出された年号案を審議する改元定に出席する公卿も同じく紀伝道に属していた。つまり、年号勘文資料に引かれる漢籍と漢籍の解釈をめぐる議論は、紀伝道に伝わる漢籍にもとづいていたわけであり、資料の制約上、研究が進んでいなかった紀伝道の漢学に対する考察を進めることが可能になると考えられる。

（２）年号選定過程に関わる学術・思想的要素

年号案を天皇に奏上する候補年号にしぼりこんで行く過程でなされる難陳では、参仕公卿の意見が開陳される。引用された漢籍の解釈を問題とするアカデミックな討論が交わされることもあれば、宗教思想の点から年号案の可否が論じられることもある。すると難陳の記録は、日本における漢学・宗教に関わる思想の変遷をたどる上での好個の資料と見ることができ、記録を分類整理して考察を加える必要がある。

辛酉革命・甲子革令の年ごとに実施された改元は、術数思想にもとづいて実施された。佐藤均による詳細な研究はあるが、鎌倉初期までの勘文が主たる研究対象であり、以後の時期もカバーするには至っていない。改元定に先立って、当該の年が革令・革命に当たるか否かを判断した議論に対する数理上の分析も不十分なので、この特殊な改元に関する研究も深める。

年号勘文所引の漢文には、返り点、ヲコト点、添え仮名などの訓点が附されていることがある。年号勘者は紀伝道の家に属する者であるから、これらの訓点も紀伝道系統に属すると予想されるが、その点は明らかにされていないので、訓点も考察対象に加える。

（３）年号勘文資料集の作成と公刊

研究者が利用可能な年号勘文資料が極めて限られているので、年号勘文資料集の公刊を実施する。影印・活字化する資料については、研究分担者と相談の上、選定する。

以上の各項目に関わる論考は、随時、国内外の学会において積極的に発表し、討議や批評を通して研究内容の深化を図る。

４．研究成果

上記の研究計画・方法に従って進めた研究活動の成果の概要を項目立てて説明すると、以下の通りである。

（ａ）年号勘文の漢籍引文の資料価値

①由来の古いテキスト：日本の大半の年号が漢籍の典拠を持つことは周知の事実だが、典拠に使われた漢籍やそのテキストまでは調査・研究がほとんど及んでいなかった。本研究計画を通して、新年号を決めるたたき台となる年号勘文に記された漢籍引文が紀伝道に属する家に収蔵されていた古鈔本にもとづきこと、鎌倉時代初期以前の年号勘文に記された漢籍引文は宋刊本流入前の古いテキストを反映していることが確認された。ただし、年号勘文を集成した高辻長成『元秘別録』が増補と鈔写を繰り返していて、テキストの乱れを引き起こしていることも確認され、漢籍引文の文字については取り扱いに注意が必要なことも明らかとなった。
②佚書・佚文の引用：年号勘文に引かれる漢籍の中には、現存しないものや部分的にしか残っていないものも含まれている。桓譚『新論』、崔寔『政論』、何法盛『晋中興書』、則天武后『維城典訓』、虞世南『帝王略論』、薩守真『天地瑞祥志』、柳芳『唐暦』、『修文殿御覧』などがそうである。これらの書物からの佚文は、たとえば桓譚『新論』の引文が『群書治要』や厳可均の輯本に見えないように、他の史資料には見えないことが珍しくないことも明らかとなった。
③間接引用：年号勘文の漢籍引文については、それが直接引用であるか、それとも間接引用であるかに留意する必要があることも判明した。『藝文類聚』や『太平御覧』などの類書からの孫引きであるにもかかわらず、そのことを示さぬまま、あたかも原典からの直接引用であるかのように年号勘文に記しているケースが時折認められた。
（b）難陳の議論と漢学
難陳の記事を集めてその内容を分類整理し、考察を加えると、難陳の中では、漢字の形音義に関わる多角的な議論が積み重ねられていたことがわかった。さらには、年号勘文に全く引用されることが無い漢籍が引かれることも珍しくないことがわかった。一つ例を挙げると、『春秋穀梁伝』は日本の漢学史の中でほとんど言及されることが無いが、難陳の中で、その字句の解釈をめぐる討論が展開されるばかりか、複数回の改元定を通して、議論が深まっていく実例が確認された。難陳の中で引かれる書物は、年号勘文と同様、漢籍に限られていたが、16 世紀以降の難陳では、『日本書紀』が引かれることが数回起こっていたこともわかった。他の国書が引かれることは絶えて無いが、『日本書紀』は「神書」と題して引かれることすらあった。難陳が 5 年半に一度の割合で挙行される改元の中で実施されることに鑑みると、難陳の記録は、日本における漢籍・漢学の受容の実態と変遷をたどるための好個の資料と言うことができ、今後更に研究を深める価値がある。
（c）訓点・訓読
年号勘文を提出する年号勘者および年号案を改元定の中で審議する参仕公卿は、いずれも紀伝道の家に属する者が大半を占め、明経道からの参加は皆無であった。中世以前の日本漢学の展開は、伝存資料の制約上、明経道、とりわけ清原家に研究が集中していたが、年号勘文の写しが記録されている官人日記、改元定記、改元部類記、もしくは年号勘文を集成した高辻長成『元秘別録』には、訓点が附されていることがある。それは改元定の中では、年号勘文が実際に読み上げられた後で、審議が始まるからであり、先例に則って誤りなく訓読することは、参仕公卿にとって重要なことであった。官人日記をもとに作成された改元の記録には、読み上げ方に関して、漢音・呉音の使い分けを含む細かい作法があったことが記されていることも判明した。年号勘文の漢籍引文に対して訓点を施した資料には鎌倉時代までさかのぼるものもあり、訓点資料としても年号勘文資料は一定の学術的意義を持つことが確認されたが、附訓の実態と整理についてはまだ作業途中にあり、この点も更なる研究の余地がある。
（d）術数
辛酉と甲子の年には、それぞれ革命・革令の年であることを理由に改元が実施されたが、これらの場合、改元定の前に、当該の年が革命改元や革令改元を行うべき年であるか否かを議論し、改元が必要なことを確認してから、改元定に移行しており、通常の改元より一つ多くのステップを踏んでいた。改元定の前段階に位置するそれらの議論には、通常の改元には見られない術数に関わる要素が関わっていた。本研究計画では、この部分にも考察を加え、改元の術数面に関わる諸説を集めた代表的な資料集の一つ『兼良公三革説』が一条兼良の手になる、という定説に見直しを迫る論考が研究分担者によって発表された。さらには、時運を改めるための革命・革令改元や災異改元の考え方の根底にある中国における改元思想について、その背景にある暦運説の術数的要素を考察する論考も研究分担者によって発表された。
（e）可視的な成果
雑誌論文と学会発表の内容を逐一説明するわけには行かないので、顕著な可視的な成果として、研究成果に関わる展示などの催しと出版物について説明する。
①展示、講演会、国際シンポジウム
研究成果を学界内で共有するだけでなく、社会に還元するために、国立歴史民俗博物館において 2017 年に特集展示「年号と朝廷」を開催し、併せて「歴博フォーラム第 106 回『年号と日本文化』」、さらには研究者以外の参加も可能な国際シンポジウム「年号と東アジアの思想と文化」を実施した。特集展示の中では、研究メンバーによるギャラリートークを 2 度行った。以上の催しは、平成からの改元実施が予告された後に開催されたので、社会的な関心も集め、特集展示については新聞報道もいくつかなされた。二日間にわたって開かれた国際シンポジウムでは、新知見にもとづく多くの報告と議論が行われ、その成果は次項に説明する出版物の一つに結実した。
②出版物
研究計画期間中に、研究成果の一部を構成する書物を 4 件出版することができた。以下、主た

る 2 件について説明する。一つは、『日本漢学珍稀文献集成（年号之部）』（中国社会科学院出版社、2018 年）であり、国立公文書館の年号関係資料 9 種を影印し、研究メンバーによる日本語と中国語による解題を附したものである。全 5 冊、4,400 頁からなる本書は、「上海社会科学院出版社 2018 年度社科類十大好書」の一つに選ばれ、既に一定の対外的な評価を得ている。もう一つは、上記国際シンポジウムで発表された論考に依頼原稿を加えて編集出版した『年号と東アジア―改元の思想と文化』（八木書店、2019 年）である。東アジアの年号全体を視野に入れたユニークな論集である本書には、研究メンバーほぼ全員が著した論考が収録されている。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 ８ 件）
水上雅晴、年号勘文資料が漢籍校勘に関して持つ意味と限界―経書の校勘を中心とする考察、中央大学文学部紀要（哲学）、59、2017 年、pp.23-42.
石井行雄・近藤浩之・髙田宗平、田中本『周易』（重文）のもう一つの顔―白点調査中間報告―、歴博、201、2017 年、pp.20-23.
水上雅晴、難陳―年号を決める議論、歴博、208、2018 年、pp.2-5.
近藤浩之、年号に使われた漢籍、歴博、208、2018 年、pp.11-14.
髙田宗平、年号勘文に引用された佚書―「経光卿改元定記」所引『修文殿御覧』を中心に―、歴博、208、2018 年、pp.10.
水上雅晴、日本年号資料与経学、中国典籍与文化論叢、20、2018 年、pp.278-289.
髙田宗平、国立歴史民俗博物館所蔵田中穰氏旧蔵典籍古文書『元秘抄』略解題、人文学論集、37、2019 年、pp.1-12.
水上雅晴、江戸時代初期の改元難陳における経学的要素、中央大学文学部紀要（哲学）、61、2019 年、pp.55-82.

〔学会発表〕（計 20 件）
水上雅晴、淺論日本國内抄寫和傳承的漢語經典文本、西域と東瀛：中古時代経典写本国際学術シンポジウム、2015 年、上海師範大学。
水上雅晴、日本年号資料中的《尚書》、国際《尚書》学会第四回国際学術シンポジウム、2016 年、香港バプティスト大学。
水上雅晴、年號與日本政治和學術、2016 跨文化視域下的儒家倫常：政道與治道國際學術研討會、2016 年、台湾師範大学。
水上雅晴・髙田宗平・近藤浩之・石井行雄、年号勘文の訓法―廣橋家旧蔵記録文書典籍類の中から―、第 116 回訓点語学会研究発表会、2017 年、京都大学文学部。
水上雅晴、日本中世公卿與漢籍：以年號資料中“難陳”為考察中心、第二屆南京大學域外漢籍研究國際學術研討會、2017 年、南京大学。
水上雅晴、「抄本時代」日本年号資料中的漢籍：以高辻長成編写的両本文献為考察中心、「古写本経典的整理与研究」国際学術シンポジウム、2017 年、上海師範大学。
水上雅晴、難陳―朝廷における改元議論の実態、歴博フォーラム第 106 回「年号と日本文化」、2017 年、国立歴史民俗博物館。
石井行雄、国語学(書記論)から見た今回の展示、歴博国際シンポジウム「年号と東アジアの思想と文化」、2017 年、国立歴史民俗博物館。
武田時昌、中国古代の暦運思想、歴博国際シンポジウム「年号と東アジアの思想と文化」、2017 年、国立歴史民俗博物館。
末永高康、いわゆる『兼良公三革説』について、歴博国際シンポジウム「年号と東アジアの思想と文化」、2017 年、国立歴史民俗博物館。
髙田宗平、論日本中世年號勘文所引《藝文類聚》、古寫本經典的整理與研究國際學術研討會、2017 年、上海師範大学。
水上雅晴、『春秋』と年号勘文資料、学術シンポジウム「『春秋左氏伝』と現代の中国学」、2018 年、二松学舎大学。
髙田宗平、国立歴史民俗博物館所蔵田中穰氏旧蔵典籍古文書『元秘抄』簡介、「日中の思想と文化」総合学術会議、2018 年、北海道大学。
石井行雄・近藤浩之、仮作正月と改元等、「日中の思想と文化」総合学術会議、2018 年、北海道大学。
名和敏光、中国出土資料に見える紀年について、「日中の思想と文化」総合学術会議、2018 年、北海道大学。
水上雅晴、難陳の議論の変遷から見えるもの、「日中の思想と文化」総合学術会議、2018 年、北海道大学。
水上雅晴、年号勘文資料中的経伝文本、「中国的経学与日本的経学」国際学術シンポジウム、2018 年、中央大学。
髙田宗平、「《弘決外典鈔》所引《孝經述議》與京都大學附属圖書館所藏《孝經述議》卷四淺析、「中国的経学与日本的経学」国際学術シンポジウム、2018 年、中央大学。

水上雅晴、日本江戸時代年號會議中「難陳」和儒家經典詮釋、第二屆儒家經典的跨域傳釋國際學術研討會--中心與邊緣的文化受容及傳釋、2018 年、香港バプティスト大学。
水上雅晴、年号与日本文化和学術、南京フォーラム 2018、2018 年、南京大学国際会議センター。

〔図書〕（計 3 件）
所功・石立善・福島金治・水上雅晴、第 106 回歴博フォーラム「年号と日本文化」、国立歴史民俗博物館、2017 年、30 頁。
水上雅晴主編、髙田宗平編集協力、石井行雄・近藤浩之・名和敏光・武田時昌・末永高康・髙田宗平・水上雅晴等著、年号と東アジア―改元の思想と文化、八木書店、2019 年、824 頁。
水上雅晴・石立善主編、日本漢学珍稀文献集成（年号之部）、上海社会科学院出版社、2018 年、4403 頁。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：石井　行雄
ローマ字氏名：ISII Yukio
所属研究機関名：北海道教育大学
部局名：教育学部
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：60241402

研究分担者氏名：小幡　敏行
ローマ字氏名：OBATA Toshiyuki
所属研究機関名：横浜市立大学
部局名：都市社会文化研究科
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：10285158

研究分担者氏名：近藤　浩之
ローマ字氏名：KONDO Hiroyuki
所属研究機関名：北海道大学

部局名：文学研究科
職名：教授
研究者番号（8 桁）：60322773

研究分担者氏名：末永　高康
ローマ字氏名：SUENAGA Takayasu
所属研究機関名：広島大学
部局名：文学研究科
職名：教授
研究者番号（8 桁）：30305106

研究分担者氏名：高田　宗平
ローマ字氏名：TAKADA Sohei
所属研究機関名：大阪府立大学
部局名：人間社会システム科学研究科
職名：研究員
研究者番号（8 桁）：80597188

研究分担者氏名：武田　時昌
ローマ字氏名：TAKEDA Tokimasa
所属研究機関名：京都大学
部局名：人文科学研究所
職名：教授
研究者番号（8 桁）：50179644

研究分担者氏名：鶴成　久章
ローマ字氏名：TSURUNARI Hisaaki
所属研究機関名：福岡教育大学
部局名：教育学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：20294845

研究分担者氏名：名和　敏光
ローマ字氏名：NAWA Toshimitsu
所属研究機関名：山梨県立大学
部局名：国際政策学部
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：30291868

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。